

1996年10月に誕生した「県短生協」は、15歳になりました。2009年には、新潟県立大学が開学し、「新潟県立大学・県立新潟女子短期大学生生活協同組合」という、日本で一二を争う長い名前になりましたが、2012年3月をもって県短の歴史に幕が下りるのに伴って、ふたたび名前を変え、春からは「新潟県立大学生協」となります。

県立新潟女子短期大学最後の卒業生となった皆さん、ご卒業おめでとうございます。短大の看板は下ろされますが、みなさんの活躍が続く限り、県短は不滅です！

新潟県立大学第4期生の皆さん、ご入学おめでとうございます。みなさんが来てくれて、ようやく4学年が揃いました。まだこんなに若い大学です。歴史も伝統もこれから作ろうとしているところですから、その輪にぜひ加わってください。

そして在校生の皆さん。生協はいつも、みなさんの学生生活を一番近くで支える存在でありたいと思います。そして生協もまた、みなさんの支えが必要です。これからもよろしくお願いします。新しく生まれ変わる学生ホールを旗印にして、みんなで新潟県立大学を盛りあげていきましょう！

新潟県立大学・県立新潟女子短期大学生生活協同組合  
教職員フォーラム

## どこでもドアのかぎ 2011 目次

村松芳多子	(食物栄養専攻/人間生活学部健康栄養学科)	.....3
小谷一明	(英文学科/国際地域学部国際地域学科)	.....5
板垣俊一	(国際教養学科/国際地域学部国際地域学科)	.....6
山中知彦	(国際地域学部 国際地域学科)	.....7
山田佳子	(国際教養学科/国際地域学部国際地域学科)	.....8
石川伊織	(国際教養学科/国際地域学部国際地域学科)	.....9
荒木和華子	(国際地域学部 国際地域学科)	.....14
澁谷義彦	(英文学科/国際地域学部国際地域学科)	.....15
小澤薫	(生活福祉専攻/人間生活学部子ども学科)	.....16
石井玲子	(幼児教育学科/人間生活学部子ども学科)	.....17
福嶋秩子	(英文学科/国際地域学部国際地域学科)	.....19
黒田俊郎	(国際教養学科/国際地域学部国際地域学科)	.....21
水上則子	(国際教養学科/国際地域学部国際地域学科)	.....23

### 特集「おいしい本」

村松芳多子	(食物栄養専攻/人間生活学部健康栄養学科)	..... 25
藤本直生	(SALCメンター)	..... 26
小谷一明	(英文学科/国際地域学部国際地域学科)	..... 26
福本圭介	(英文学科/国際地域学部国際地域学科)	..... 27
板垣俊一	(国際教養学科/国際地域学部国際地域学科)	..... 28
山中知彦	(国際地域学部 国際地域学科)	..... 29
石川伊織	(国際教養学科/国際地域学部国際地域学科)	..... 30
黒田俊郎	(国際教養学科/国際地域学部国際地域学科)	..... 33
水上則子	(国際教養学科/国際地域学部国際地域学科)	..... 33

## 正しいパンツのたたみ方

南野忠治 著 岩波ジュニア新書

高校で英語の教鞭に立っていた教諭のお話です。英語の先生だったはずが、13年後に家庭科の先生になり、「生活力を身につけろ！」を生徒たちに教えています。人生は自分で切り拓いてゆくものです。その大前提が「生活力」です。生活力アップのガギは家庭科にあるのです。具体的に役立つ生き方勉強法（新しい家庭科勉強法）を学びましょう。

家庭科を学ぶ意味（パンツのたたみ方など）、いま、生きているワタシ（朝ご飯を考える、自立ってなんだろう？ 勉強ってなんだろう？ など）、家族の中で生きる（家族って誰のこと？ 家族の食卓、「理想の結婚相手」で考える人間関係など）、社会の中で生きる（働くということ、お金はこわい！ 老後に備える、パーソナルな技術がなぜ必要かなど）、ゆたかに生きるためのスキル（あなたの遊びはどのレベル？ メッセージを送り続けるなど）を体験をもとに紹介しています。

## 日本人の9割に英語はいらない

成毛眞 著 祥伝社

著者の成毛眞氏はマイクロソフト日本法人元社長です。グローバル化が進んでも、外国人を相手にしなければならない人が英語を使えれば十分という考え方を説いています。労働者のほとんどが日本人であるのに、日本の会社が英語を社内公用語にすることは勧めない。日本語を流暢に話す外国人の方も会話はできて、理解は半分ということを知ります。なぜなら、英語を話すことのためにエネルギーを費やし、本来の業務である仕事力が落ちること、また英会話ができるということを大前提に採用しても仕事能力「0（ゼロ）」ということもあり、会社の大損失になるからです。「英語ができてバカはバカ」はこれにつながります。仕事能力と語学能力は別ということ？ です。著者は英語力よりもゴルフを勧めています。さあ、みなさんゴルフを始めましょう！

# 「裏日本」文化ルネッサンス

NPO 法人 頸城野郷土資料室 編

(石塚正英・唐澤太輔・工藤豊・石川伊織 著) 社会評論社

始めにこの本の楽しみ方をご紹介します。駅弁を買い込んで信越本線の電車に乗ります。そしてのんびりこの歴史書を電車の中で読むことが醍醐味です。意味不明かもしれませんが、信越本線が裏の奥であるからです。電車の中で「裏」と「奥」を感じて欲しいと思います（のんびりする時間のない方は、現代路線地図を片手に見ながら楽しんでいただきたいと思います）。

東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）の際には、太平洋側の輸送手段は寸断されました。さまざまな物資を輸送する手段に裏日本ルートが頻繁に利用されたていたのはご存じでしたか？実は裏日本ルートには歴史があるのです。太平洋側育ちの私は、日本海側に来たときに移動の不便さを感じました。太平洋側は東海道本線（複線）と新幹線があり、どこへ行くのも短時間移動が可能でした。日本海側は隣県に行くのさえ1日かかってしまう始末です（なんて不便な地域！という印象があります）。日本の鉄道政治の失敗ではないか？と思った時にこの本に出会いました。北陸新幹線の開通が待ち遠しい方もいるでしょうが、現地の人々の思いとインフラ整備の歴史、裏日本文化を考えてみませんか。

## HIROSHIMA

小田実著 講談社文芸文庫 1997

この小説の舞台は第二次世界大戦前夜から戦後にかけての世界空間だ。冒頭はニューメキシコなどアメリカ南西部が舞台となる。そこに住む先住民のなかに、非戦の伝統から良心的懲役拒否を宣言した人たちがいた。彼らは投獄・逮捕されたりしたが、その生地・聖地で原爆実験が行われる。ここから物語の縦糸、横糸が無尽の如く交差する。先住民と日系人の共時性、帰郷した二世と疎開した大阪人、在日朝鮮人とのすれちがい、そしてアジア侵略が「ホロコースト」とタイトルのヒロシマに結びつき、アメリカ西部へと引き戻されていく。小説は惑星的な想像に乗り、終わりを知らない旅のように進んでいく。

## 原爆の子（上下）

長田新編 岩波文庫 1990

教育学者の長田新（おさだあらた）は、戦後まもなく小学生から大学生までを対象に、広島で原爆が落とされた当時のことについて聞き取り調査を行った。投下から六年後、その成果が証言集として出版される。主な内容は、一九四五年八月六日の瞬間の記憶や、GHQ による占領が終わった五一年までの生活についてである。読み進めるにつれ、気づくと「ドーン」とか「ピカッ」といった表現が出てくることを期待している自分に気づく。それほどに「瞬間」は知りえず、不謹慎ではあるが同時にその淵へと引き込まれてしまう。そして次第に、言いしれぬ気分の悪さがつのってくる。酩酊のなかの嘔吐感のような気分だ。バラック生活、原子野に住み始めた非広島出身者、原子力の未来に対する期待など、驚きの多い本だった。

## 夢酔独言

勝 小吉著 平凡社刊 1969

勝海舟といえば幕末に咸臨丸で日本人による初の太平洋横断に成功した人物、また江戸城の無血開城を行なった人物として著名である。この人の家系は越後とも関係があって、彼の曾祖父にあたるひとは柏崎出身の盲人、米山検校という人であった。検校といえば盲人の最高位であり、その子平蔵は江戸で旗本になっている。ここに紹介する本の著者勝小吉はその実子である。また勝小吉は海舟の父親である。海舟と比べるとその父はなんとも始末におえない「非行少年」「不良青年」であつたらしい。その人物が四十歳ごろ殊勝にもみずからの行動を反省して、それまで自分が行なった愚行を記して、子孫の教訓にしようとした書である。本人みずから言う。「おれほどの馬鹿な者は世の中にもあんまりあるまいと思ふ」と。そしてまた「男たるものは決しておれが真似をばしないがいい」と。自分の愚かさをさらけ出して反面教師の家訓を残すというのだが、そんなことは聞いたこともない。それがまた常識はずれなことであるからおもしろい。

子どもの頃は喧嘩ばかりやっていた。また、家出して東海道を乞食になってさまよった。盗みもし、嘘をついて人もだました。剣術の修行をしては道場破りをした。やりたい放題のあと、四十歳の時に二年近く謹慎処分にあつて外出を止められた。彼はそのとき読書などをしながら自分の人生を反省し、本書をしたためたのである。学問などはしなかったから人並みの文章も書けない。すべて話し言葉である。

推薦者はこの書を坂口安吾の評論によって読んでみる気になった。

## 震災トラウマと復興ストレス

宮地尚子 岩波ブックレット No.815 本体価格 500 円

3.11 後、震災に係る様々な書誌が出版されました。私が目を通せたのはその中の限られた数冊ですが、本書ほどすべての人々への支えを意識した書誌は無かろうと思います。精神科医である著者は、自身の提起する「環状島」という極めて説得力のあるモデルを援用し、被災者・支援者・傍観者（著者は「被災地から遠い人たち」と表現）すべてへの思いやりをもって、震災という非常時に露呈する日常に潜在する私たちの心理を解説してくれています。今までに私が読んだ中でも最も実直なあとがきを含め、冊子そのものが臨床心理療法になっているように感じます。震災に接し、どこか虚しさを感じている君たちに一読をお勧めします。

## デフ・ヴォイス

丸山正樹 文藝春秋

「手話」は身振り手振りだと思っている人も多いかもしれませんが、独自の文法体系を持つ一つの「言語」です。そして手話はそれを使う人々の文化の一つでもあります。「異文化交流」、「異文化理解」と言うと、ついつい外国人や外国文化を思い浮かべがちですが、もっともっと身近なところを知るべき文化が存在しています。手話を学ぶことは福祉としても必要ですが、私は言語として、異文化としても以前から手話に関心を持ってきました。でもこの本を読んで、自分の理解がいかに浅かったかを知りました。とは言っても、この本は解説本などではまったくなく、推理仕立ての小説です。このような形で手話を使う人々の世界を書いた本はかつてなく、画期的と言えるでしょう。是非、この身近な異文化の扉を開いてみてください。

## 耳の聞こえない私が4カ国語しゃべれる理由

金修琳 ポプラ社

著者は「耳の聞こえない」韓国人女性です。幼い頃聴覚を失い、訳あって日本で暮らすようになったために日本語を「口話」（相手の口の動きを読んで会話すること）で覚え、自ら希望してイギリスに留学して英語を学び、旅をしてスペイン語をマスターしました。そしてついに外資系の一流企業に就職しました。単なる成功談と言ってしまうとそれまでかもしれませんが、そこに辿り着くまでの過程はちょっと想像してみてもわかるとおり、まったく人並ではありません。幼い頃から数々の逆境を乗り越え、自らの望む「幸せ」に向かって前向きに生きる彼女の姿にただただ驚かされるばかりです。

## パラディオのローマ 古代遺跡・教会案内

パラディオ著：ヴォーン・ハート／ピーター・ヒックス編  
桑木野幸司訳 白水社

パラディオは、16世紀のイタリアの建築家です。1554年に出版された手のひらサイズのローマ案内のガイドブックが大ヒットしました。本書はその翻訳です。かれの主著はこれとは別にあって、専門家や王侯貴族に向けて書かれたものでしたが、本書は素人向けのちょっとした観光ガイドです。しかし、この訳書が面白いのは、パラディオが紹介している建物や遺跡の図面を、かれの主著その他から持ってきて挿入しているほかに、それらの建物や遺跡の現在の状況をたくさんの写真で紹介しているところです。ことによると、1554年の原書よりもより素人向けになっているんじゃないかと思います。今でもなお、ローマ観光のガイドブックに使えるそうですよ。それにしても、500年近く経っても使えるガイドブックもすごいけれど、そのころと同じ建築が今でも多数街の中に存在しているローマという都市もすごいです。京都でさえ、市内の建築物などほとんどが江戸時代のもので、それより古いものは数えるほどしかありません。これは、素材が石材が木材かというちがいだけではなくて、都市計画という思想それ自体に問題があるのだろうと、私は思います。

## ジャック・ルーボアの極私的東京案内

ジャック・ルーボア著 田中淳一訳 水声社

フランス人の詩人が東京に長期滞在して書いた、東京の詩とでもいべき旅行記。新宿から始めて山手線を時計回りに、一駅ごとに降りて、詩作しながら彷徨います。たとえば、新宿御苑で彼に話しかけてきたハルミという女性と交わした詩。

彼 The sun  
shines  
from the tree  
and Harumi's eyes  
shine  
from the sun

ハルミ jacques loves walking  
I love eating  
God loves smiling  
and the sun is moving

これって、連歌？

しかし、傑作は、西新宿のTOTOのショールームで見たウォシュレットだったみたいです。この記述が一番長い！抱腹絶倒ですが、なんとなく泣ける、いい旅です。

## 夕モリの TOKYO 坂道美学入門

夕モリ 講談社

いい旅といえば、ブラタモリでしょう。あの放送が始まったときは、私は、「これ、受けるんだろうか？」と思ったんですね。だって、ああいうことは地理や歴史に関心のある人なら誰でも、むかしからコツコツやっていたことだし、そういうことをする人たちはオタク呼ばわりされて、苛められていたから。夕モリさん（番組中では夕モリさんと呼ばひ捨てにした小学生が叱られてましたよね）がああいうことをやるから、番組になるのかなとも思いましたが、かれの蘊蓄はなかなか深い。これまで、オタクが後ろ指さされながらやってきたことがみんなに評価され始めたのだから、それはそれで結構なことです。で、この夕モリさんが出した東京の坂道の本です。再開発されて、江戸時代の面影は残っていないかとも思われる東京ですが、どうして、特に坂は江戸時代のままの位置で江戸時代のままの名前で残っている例が大変多いのですって。さて、新潟の現在はどうか？ ソウルにならって西堀ローザをほじくり返し、堀を復活させるのはどうかしら？

# The Long Goodbye

Raymond Chandler

## 長いお別れ

清水俊二訳 ハヤカワ文庫

## ロング・グッドバイ

村上春樹訳 ハヤカワ文庫

村上春樹さんは、サリンジャーの新訳を出して以来、次々と古典的名作の新訳を手がけています。ハードボイルドの名手・チャンドラーのこの本は、「さよならを言うことは、ほんの短い間死ぬことだ」という名台詞で有名だし、夕方早い時刻にだれも客のいないうちのバーで飲むギムレットでも有名ですが、これを村上さんの新訳で読むのは心地よいです。古い清水さんの訳も、なかなか渋いのですが、ハヤカワ文庫は清水さんの旧訳も村上さんの新訳も両方刊行してくれています。これもなかなか渋い配慮です。ハードボイルドの本質とは何かについては、私も考えるところがあります。内藤珍さんも亡くなったことだし、こゝろで新訳を読みつつ考えてもいい時代なのだと思います。チャンドラーは、同じく清水さんの旧訳と村上さんの新訳で Farewell, My Lovely もハヤカワ文庫から出ています。清水訳は『さらば愛しき女よ』、村上訳は『さようなら、愛しい人』。

# 原発依存と地球温暖化論の策略

中野洋一 法律文化社

地球温暖化論というのは、原発推進派がでっち上げたインチキ理論だという主張を真っ向から展開する経済学者の本。ウソか本当かは、読んでみてから考える必要があるでしょう。何しろ、縄文時代の日本の海岸線は、今よりはるかに内陸に位置していて、そのころの平均気温は今よりはるかに高かったのです。そしてこれは、温室効果ガスの問題ではなく、間氷期の普通の現象でした。しかも、日本では大きくは取り上げられなかったけれど、IPCCの秘密文書がハッキングによって暴露されてしまって、温室効果ガス説をめぐって、でっち上げや利権がらみのドタバタがあることが判明してしまいました。そもそも温室効果ガス説に科学的根拠が希薄なことが知られるようになってしまいました。これはもうスキャンダルです。もう、利権と結託した自然科学者の暴走に付き合うのはやめる時期です。

## 関東大震災・日本国有鉄道震災日誌

鉄道省編・老川慶喜解題 日本経済評論社

先ごろ、毎日新聞社が「第32回毎日経済人賞」をJR東日本の清野智社長に授与しました。理由は、震災にもめげず、東北新幹線を早期に復旧させたから、だそうです。笑わせてはいけません。採算の取れそうにない東北の在来線は復旧の見こみすら立っていません。それもこれも、自治体の再建計画が立っていないからだ、JRは人のせいにはしています。しかし、関東大震災の時は、その日のうちに被災地東京の鉄道は復旧・運行が始まり、約2か月で震災前の状態にもどっています。当時は列車はSLが引っ張っていて、線路さえつながれば、電気なんかなくてもすぐにでも列車が動けたから、というのは確かです。しかし、自治体の発表を待っていたりはしませんでした。行政のせいになんかしませんでした。とにかく復旧。その意味では三陸鉄道は数日後には動かせるところから動かしているのですから、鉄道人としての気概という点で大変に立派でした。JRは三陸鉄道の爪のアカを煎じて飲ませていただくべきです。経済人賞なんて大笑いです。というわけで、関東大震災の時の当時の日本国有鉄道の震災日誌が本書です。奇麗事を言う嘘つきどもに騙されないようにするには、事実に基づく研究以外にはありません。原資料を直接読みましょう。

# エロティック・ジャポン

アニエス・ジヤール にむらじゅんこ訳 河出書房新社

日本のオタク文化を研究するフランスきっての研究者による、日本のアンダーグラウンド文化、とりわけ性風俗についての研究書。どこで集めたのか、写真や図版が多数！ 多少の誤解はあるけれど、これは実に浩瀚な研究書です。これと比べたら、京都大学人文科学研究所共同研究班が出版した、共同研究のまとめ『共同研究 ポルノグラフィー』（大浦康介編、平凡社）なんか、所詮は子どものお遊びです。こういう下世話な研究をするのに、なぜ京大の先生たちは奇麗事に終始するのでしょうか。

# アメリカ合衆国と中国人移民— 歴史のなかの「移民国家」アメリカ

貴堂嘉之（きどうよしゆき）著 名古屋大学出版会

初版発行が 2012 年 2 月 29 日ですから、出版したて「ほやほや」の本をご紹介します。著者は現在、アメリカ史学において人種、国民国家、ジェンダー論に関する cutting edge（最先端）の研究をおこなっており、最も注目されている中堅の研究者です。これまで多々の重要な研究書や学会誌において、研究会・学会を揺るがすような論考を発表し、まさにこの分野の研究の発展において中核を担っておられる著者による、待望の初の単著が今回出版されました。著者があとがきにおいて、「アジア系アメリカ人史やアメリカ移民史の専門家のみならず、中国近代史や日本近代史に関心を持つ方々、奴隷や不自由労働を含む国際労働力移動の歴史や理論、環太平洋/環大西洋史のグローバル・ヒストリー、オリエンタリズムや人種主義、差別の歴史に興味を持つ方々にも広く手にしてもらえることを期待し[ている]」（275–276 頁）と自ら述べたように、スケールが膨大であり、それでいて歴史の実証度と理論的なレベルの高さにおいても他に凌駕するものはないほどの研究書として仕上がっており、紹介者が 300%の自信を持って読者に推薦します。ただし専門書であり、密度が濃く、難易度も高いため、読破することは容易ではないかもしれません。アメリカ合衆国における移民制度確立のプロセスに関する歴史研究ですが、日本に暮らす私たちが「他者」との関係の歴史について省察する際にも、この著作は極めて有効です。帯には「アジアから問い直す」とあります。近代西洋社会における国家による管理体制の生い立ちを、「アジアから問い直す」と、どのような答えが導きだされるのでしょうか？外国人や移民に対する排他的な運動や「まなざし」はどのようなプロセスを経て正当化され、それらのプロセスに携わった人々に（人権派にとっては皮肉にも）市民権を獲得させたのでしょうか？本書を紐解いてみませんか？ちなみに私は、今後長くにわたり読み継がれること間違いのないこの「新たな古典」の誕生に立ち会いながら越年し、ラッキーな 2012 年を確信したのでした。

# ケースで学ぶ異文化コミュニケーション

## —誤解・失敗・すれ違い—

久米昭元・長谷川典子著 有斐閣選書

本書は「異文化コミュニケーション (Intercultural Communication)」の入門書として優れています。21世紀のグローバル化する日本社会において、「異文化コミュニケーション」すなわち「文化的背景を異にする存在同士のコミュニケーション」は教養の一つとしてますます重視されていくでしょう。しかし、このクールな名称の内実は、大変に悩ましく、時にはその人の自尊心すら危うくしてしまうものです。しかし、私たちはもう異文化接触を避けては通れない時代に入りました。本書は、文化の定義を「一定の地域の中で長年の間に築き上げられ、人々の頭の中に蓄積された「共通の思考体系」としてはいますが、さらに広い意味で、世代やジェンダーの違いによる文化も視野に入れてはいます。本書では、在日韓国人、留学生、旅行者、帰国児童・生徒、海外赴任者、外交官、国際協力隊員などが異文化接触によって実際に体験した誤解・失敗・すれ違いなどのエピソードや失敗事例、危機事例を紹介し、それらの原因を考察しています。次に著者が要約した異文化摩擦の12の要因は挙げておきます：

1. 「人みな同じ」の思い込み。「人間は所詮人間、わかり合える」という思い込みほど危険なことはない。「違ってあたり前」と思った方が無難。
2. 「間違い探し？」の傾向。外見上の違いばかりに目を奪われると本当の相手が見えなくなる。「人みな同じ」の思い込みとは逆説的だが、「共通点を探し合う」ことも大事。「人みな同じ」という思い込みを排除しつつ「間違い探し」は慎むという離れ業が必要。
3. 意味は言葉にあり？「言葉の意味は、言葉に付随している」と思うと、言葉を使って相手に伝えれば、意味は確実に伝わると思ってしまいが、「意味は人にあり」である。たとえば「母」、「よい生徒」、「よい妻」は人によって思い浮かべるものは異なる。
4. 非言語コミュニケーション①—時間感覚。文化によって時間に対する感覚が違うことがある。時間を直線的にとらえて無駄を惜しむ M タイム ( monochronic time) とイベント中心でゆったりと流れる T タイム ( polychronic time) 感覚がある。例えば、駅で待ち合わせした日本人とケニア人が合う場所を間違えてしまった。日本人は 30 分待って帰ったが、ケニア人は 6 時間待った。
5. 非言語コミュニケーション②—空間感覚。文化によって快適な対人距離と広さの感覚が異なる。

6. 固定観念を抱く—ステレオタイプ。
7. 人を見下す—偏見
8. これだけは譲れない—価値観。
9. これだけはしていけない—倫理観。
10. 問題解決への道筋—思考法。
11. 一番賢いのは私たち？—自文化中心主義。
12. ちょっと待て！—即断の傾向。自分の「ものさし」で一度評価や判断をしてしまうとそれ以上考えなくなる。

「異文化コミュニケーション」に関心のある方に推薦します。

人間生活学部 子ども学科 **小澤薫**

## 釜ヶ崎のススメ

原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓 編著 洛北出版

「釜ヶ崎」をという場所を知っていますか。大阪の JR 環状線の「新今宮」が最寄り駅。通天閣からも徒歩圏内。そこは日雇労働者の街。いまは「福祉の街」とも言われている。生活保護の受給者が多く、立ち並ぶ宿泊施設の入り口や看板には「福祉の方、歓迎」と書いてあるところも。この地域にも、もちろん保育園、児童館、小学校、中学校がある。この地域には男性が多い、しかもひとり暮らし、さらにいま高齢化率は40%を超えている。それでも早朝5時には、多くの人が仕事を求めてごった返す場所。また、最近、外国人バックパッカーがここを拠点に日本を旅するという。かつて日雇労働者がここを拠点に全国を飛び回っていたように。本書はそんな釜ヶ崎という街の歴史といまに触れることができます。それは、日本の歴史といまと未来。

## 小澤征爾さんと、音楽について話をする

小澤征爾・村上春樹 著 新潮社

芸術分野で世界を代表する村上春樹氏と小澤征爾氏の対談の本です。村上氏は小澤氏の生き方について、「ここまで『うん、それはわかるようなあ』と自然な共感を抱ける人に巡り合ったことはなかった。」と語っています。この対談を読んでいると、音楽と文学という領域は違っても、「自分の仕事に没頭している時が何よりも幸福」と感じている2人の共通点が発見できて面白いです。また、本物を追求している彼らの生き方に、ほんの少しでも近づきたいと思いつつながら本を読み終えると、なぜか幸福な気分になりました。クラシック音楽をよく知らない人でも、楽しめるのではないのでしょうか。

## 「クラシック音楽」はいつ終わったのか？ —音楽史における第一次世界大戦の前後—

岡田暁生 著 人文書院

大戦勃発前の1910年前後になると、一般聴衆にとって受け入れがたい種類の音楽、娯楽として社会に受け入れられることを拒絶するような音楽が書かれ始めるようになります。シェーンベルクの無調音楽、リヒャルト・シュトラウスのオペラ「サロメ」、ストラヴィンスキーのバレエ「春の祭典」の音楽やピカソ・カンディンスキーの絵画は、一体どのような社会的背景があって生まれてきたのか？音楽史にとって第一次世界大戦は何であったのか？という疑問に答えてくれる本でした。「第一次世界大戦と音楽」というテーマでの研究はまだ始まったばかりのようなので、著者の今後のさらなる研究を期待しています。

# よるくま（絵本）

酒井駒子 偕成社

私が今、最も気に入っている絵本を紹介します。我が家の子どもたち（4歳と2歳の双子）も大好きで、寝る前に「読んで、読んで」と頼まれて、毎晩読んでいる絵本です。優しいタッチで描かれる人物のイラスト、よるくまの愛くるしい表情、印象的な背景に加えて、「ああ あったかい。おまえはあったかいねえ。」などの言葉の選び方のセンスが素敵で、子どもの目線と大人の目線の両方から、この“よるくま”の独特な世界に入り込めるような絵本です。とにかく、読んでいる私自身がほっこりとした気分、穏やかな気分になれて、大人にも子どもにもおすすめの絵本です。

## 井上ひさしの日本語相談

井上ひさし 著 朝日文芸文庫 (1995)

## 日本語教室

井上ひさし 著 新潮新書 (2011)

井上ひさしは日本語に造詣の深い作家である。もう30年ほど前になると思うが、週刊朝日に「日本語相談」というコラムがあり、国語学者の大野晋、作家の丸谷才一、詩人の大岡信とならんで、日本語の語源・歴史・意味・文法・風俗など様々な疑問に答えていた。最初にあげた一冊は、井上ひさし担当の回をまとめたものである。疑問の一部を紹介すると、「なぜ「キラキラ」はカタカナなのか」、「日本語の音はいくつあるのか」「方言を正確に文字化できるのか」などである。二冊目は、2001年に井上ひさしが母校上智大学で行った伝説の名講義を文字化したものである。日本語の今、歴史、音、表現について縦横無尽に語っている。井上ひさしといえば、思い出すのは「吉里吉里人」であり、「国語元年」である。いずれも小説であるが、方言が重要な役割を果たしている。「吉里吉里人」は、独立した東北の村をめぐる騒動を描いた小説で、ルビ付きの方言会話が効果的に使われていた。後者は、NHKでドラマ化されたが、明治期の人々がそれぞれの方言で話してお互いに通じない状況が面白く描かれていた。『井上ひさしの日本語相談』は手に入りにくいようだが、それ以外の上に掲げた本と四人全員のコラムをまとめた『日本語相談』1・2は本学図書館に所蔵されている。

# 「お笑い」日本語革命

松本修 著 新潮社 (2010)

「マジ」も「キレル」も昔は使われていなかったことを知っているのは、何歳以上だろうか。今だれもが使うようにみえるこれらのことばを広めたのはお笑い芸人だった。著者は、「探偵！ナイトスクープ」を立ちあげた朝日放送のプロデューサーであるが、番組で「アホ・バカ分布図」を作り、国語史文献の研究をして、本まで書いてしまった（『全国アホ・バカ分布考 はるかなる言葉の旅路』本学図書館所蔵）。本書には、自ら番組で言葉を広めた経験をもつ筆者が、実際に芸人の話を聞き、文献調査なども行ってまとめた新語発生と伝播の軌跡が描かれている。さて、誰がどの言葉を広めたのだろうか。

# 国際共通語としての英語

鳥飼玖美子 著 講談社現代新書 (2011)

本年1月に本学にお招きした鳥飼玖美子先生は、グローバル時代の英語にふさわしいわかりやすい英語で国際地域学部の1年生に特別講義をしてくださった。日本人がめざすべき「通じる」英語とは何か、知りたい人は読んでみてほしい。（本学図書館所蔵）

『どこでもドアのかぎ』のために選書するとき、私は、自分の専門分野の本（政治学とか国際政治とか・・・）は選ばないことにしているので（その理由は長くなるから省略する）、今年もまたいつものように小説を何冊か挙げることにしたい。

## ドリナの橋

イヴォ・アンドリッチ 恒文社

昨秋、ボスニアに旅をして、帰国後、かねてから読みたいと思っていたイヴォ・アンドリッチの『ドリナの橋』（恒文社）を古書店で入手し、一読、旅の思い出はますます味わい深くなった。セルビアとボスニアの境界を流れるドリナ川、その河畔の街ヴィシエグラードの年代記である本書を繙くと、ある町の年代記という点では、ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』に相通じるものを持ちながら、読後感は、むしろ北杜夫の『楡家の人びと』に近かった。かつて三島由紀夫は『楡家』を絶賛し次のような一文を認めたが、その評は、一字一句そのまま『ドリナの橋』に転用することが可能であると私は思う。

### 北杜夫『楡家の人びと』（新潮文庫）

戦後に書かれたもっとも重要な小説の一つである。この小説の出現によって、日本文学は真に市民的な作品をはじめ持ち、小説というものの正統性を証明するのは、その市民性に他ならないことを学んだといえる。これほど巨大で、しかも不健全な観念性をみごとに脱却した小説を、今までわれわれは夢想することもできなかった。あらゆる行が具体的なイメージによって堅固に裏打ちされ、ユーモアに富み、追憶の中からすさまじい現実が徐々に立上るこの小説は、終始楡一族をめぐる展開しながら、一脳病院の年代記が、ついに日本全体の時代と運命を象徴するものとなる。しかも叙述にゆるみがなく、二千枚に垂んする長編が、尽きざる興味を以て読みとおすことができる。初代院長基一郎は何という魅力のある俗物であろう。諸人物の幼年時代や、避暑地の情景には、何というみずみずしいユーモアと詩があふれていることだろう。戦争中の描写にさしはさまれる自然の崇高な美しさは何と感動的であろう。これは北氏の小説におけるみごとな勝利である。これこそ小説なのだ。（三島由紀夫 評）

# 悪童日記

アゴタ・クリストフ ハヤカワ epi 文庫

北杜夫が死んだ2011年に、アゴタ・クリストフもまた、唯一無二の傑作『悪童日記』（ハヤカワ epi 文庫）を残して死んだ。彼女の作品はこれだけ読めば良いと思うし、これだけ読めば十分だとも思う。そして「白い文体と、研ぎすまされた蒼い光を放つ刃のような結末をもった、完璧無比の作品」と評されたこの物語こそ、3・11後に最も読まれるべき一冊なのかもしれない。

## 見て見ぬふりをする社会

マーガレット・ヘファーナン 河出書房新社

「無関心な人」は実は共犯者なのだ。そう断じたのは、ソビエト時代のポーランド系作家ブルーノ・ヤセンスキーでした。見ているだけで、関わりを持たずとしない人、起こっている事態を止めようという行動を起こさない人は、実は加害者と同じなのだ。

「見て見ぬふりをする社会」はノンフィクションですし、ここで題材とされているのは、アメリカの金融詐欺事件や製油所の大事故、欧米のカトリック教会の児童虐待事件、イギリス医学界の事件などで、ヤセンスキーの小説「無関心な人々の共謀」の舞台となったスターリン時代の社会からは遠く離れています。しかし、これらの「見て見ぬふり」の事例の中に登場する「普通の」人々、悪をなそうという意図などなく、無関心であるがゆえに、あるいは、無関係でありたいと願ったがために、事態を止めなかった「だけ」の人々は、ヤセンスキーのいう「共謀者」となんと似ているのでしょうか。

そして、この本を読んで強く感じたのは、自分もまた、いつ「無意識の共謀」にはまりこんでもおかしくない、ということでした。そうならないためのお手軽な解決策は与えられていません。「見て見ぬふりは自分の意志で行われるもの（中略）」という事実を知ることが、我々にそれを変える力を与えてくれる」（第12章）このことばを、肝に銘じておこうと思います。

なお、この本は「ほんぼーと」で借りたのですが、読み終わった後、手元に置いておかなければならない、と思って購入しました。本学の図書館にも近日中に入れていただこうと思っています。

特集  
おいしい本

## 食堂かたつむり

小川糸 著 ポプラ文庫

タイトルの「食堂かたつむり」は物語の主人公（倫子）のお店の名前です。倫子は失恋が原因で声を失い、ふるさとに戻り食堂を始めます。1日1組のお客様のために料理を作る食堂で、メニューはありません。お客様のために作る特別メニューの料理です。この食堂で食事をすると夢が叶うというわさが立つほどの人気店になります。心をこめてお客様のために作り上げたお料理は、それを食べた人々の心の扉を自然と開け奇跡が起こるのです（夢が叶うにつながる）。どんな料理が提供されたか想像して自分で作ってみるとよいかもかもしれません（実は「食堂かたつむりの料理（レシピ本）」も出版されています）。

## シネマ食堂

飯島奈美 朝日新聞出版

さまざまな映画に出てきた料理のレシピ集です。南極料理人（鶏の唐揚げ）、ヴィヨンの妻（もつ煮込み）、東京タワー（がめ煮）、大統領の理髪師（チャプチェ）、クレイマークレイマー（フレンチトースト9）、レミーの美味しいレストラン（ラタトゥユ）、ライフ・イズ・ビューティフル（サーモンソテー）、ノッティングヒルの恋人（ブラウニー）、ショコラ（生チョコレート）、ALWAYS 続・三丁目の夕日（すき焼き）、かもめ食堂（シナモンロール）、食堂かたつむり（野菜ポタージュ）などの全66レシピ集です。お料理をつくる前にその映画（66映画）を見ると二重の感動を味わえると思います。

## The Naked Chef

Jamie Oliver Penguin Books

私は、Self-Access Learning Center (SALC) にメンターとして勤務していますが、今回は SALCにあるおいしい本を1冊紹介させて下さい。この本は、イギリス人のイケメン・シェフであるジェイミー・オリバーさんが書きました、その名も“The Naked Chef”！日本語に訳すと、『裸のシェフ』とでもなりますでしょうか。

イギリスの料理と言うとあまり評判がよくありませんが、イタリアで修業を積んだジェイミーが、気取らないヨーロッパアンスタイルのお料理をたくさん紹介した、英語のレシピ本です。スープやサラダ、肉、魚料理に加えてデザートまでありますよ。英語がむずかしいと感じる方は、著者がその料理を作っている様子を撮影したDVDもありますから、SALCでDVDを見てから本を読んでもいいかも知れませんね。あなたもジェイミーのレシピ本で、お料理と英語の両方を勉強してみてください。

国際地域学部 国際地域学科 小谷 一明

## ホルモン奉行

角岡伸彦 新潮社（文庫）2010

以前、ここで紹介したことのある上原善広『被差別の食卓』（新潮新書、二〇〇五）がホルモンに深く関わらせるきっかけとなった。「放るもん」が語源とも言われるような部位の肉。今では関西各地で「油かす」うどんのチェーン店もできているようだ。神戸の長田（ながた）区では「ほっかけ」コロケが町おこしのために担ぎ出されている。人気の背後には、作者のような筋金入りのホルモニストが大勢いるのだろう。「あそこ、うまいでえ」といった口伝の力が世直しをすすめたはずだ。一方、サワーで一気に流し込まない限り、飲み込めないようなホルモンもある。しかし「まずいんだろうな」と思いながら、なぜかお腹がグーとなるのだ。ヒトの雑食性について学ぶための本である。

## 沖縄のそばと食堂'05～'06

大野益弘 ジャニス

これは、沖縄通の先輩〇氏から、古くなったからあげる...といただいた本。沖縄そばの専門店と、地元にあされるしみじみうまい沖縄の大衆食堂の情報が満載のガイドブックである。沖縄に向かう飛行機の中でこの本を開けば、もう舌が旅の準備をはじめ、胃袋がうなりはじめる。目当ての店にたどり着いたとき、なぜか休みだったり、時には、もう店を畳んでいる!ということも、もちろんある。そんなときは、落ち込みつつも、歴史ある店の看板をみあげ、残念な気持ちを投げ放ち、心を空にしてしばしたたずむ。おばあさんやおじいさんに支えられた小さな名店は消滅しつつある。戦闘機の音が空でうなる。湯気があがっているうちに、逃げ。

## 麵通団のさぬきうどんのめぐり方

田尾和俊 西日本出版社

私は、四国の香川県の出身で、これでも、うどんにはうるさいほうである。でも以前からそうだったわけではない。さぬきうどんブームにのっかりつつ、帰省するたびに友人たちと「うどん」を再発見していった。この本に載っている「山越うどん」を初めて訪れたときは驚嘆した。田んぼに囲まれた、なんということもない香川のふつうのうどんや。でも行列になっている。セルフのうどんやなので、並んで待つと古い厨房のなかにまでたどり着く。そこで、うどんをゆでている釜の前のおばさんに注文。たのんだのは、「釜たま」。あつあつもちもちの釜あげうどんに、生たまごと生醤油をからめた一杯 150 円である。こんな 150 円には、出会ったことがない!湯気までうまい。感動がしばらくおさまらず、片田舎でこのような仕事をしている人物に激しく嫉妬した。うどんは、昼過ぎには売り切れる。この本を持って、逃げ。(今は少し値上げされてたようで、200 円なり。)

## フランス農村物語

池本喜三夫著（1944、新正堂刊 1971年に第3版が出ている）

著者は、フランスに留学して社会学・農村経済学を研究する学者（故人）であった。その彼が調査ために訪れたフランス農村で見聞したことを一般人向けに書いたものである。時代は昭和初期のことで、モントリシャールの町の近くのブイエ村という農村に住み、村人に受け入れられてすっかりうちとけ、彼らの生活や心情を深く理解した著者ならではの見聞録である。

今回の推薦図書「おいしい本」特集募集のチラシに、ナイフとフォークが添えられたイラストを見て、世界に知られたフランス料理を連想した。でも、フランスの郷土料理ってどんなのだろうと思った。黒田先生に聞けばわかるかも知れないが、パリジャンの料理と伝統的な田舎料理は違うのではないだろうか？ 第一、この本に紹介される農村では、招かれたときには必ず自分が喰うためのナイフを持参するのがマナーらしい。肉食の文化では当然。ナイフとフォークの使い方などあったものでない。もう昔のことだが、ナイフを持参しないと農村では笑われるという。もちろん葡萄酒を始め、森からは兎も捕れるし、食材は自給自足。

推薦者は庶民の娯楽であった「覗き眼鏡」に関する西洋の記事を探すためにこの書を開いたのだが、20世紀前半のフランス農民の姿が生き生きと書かれていておもしろかったので皆さんにも推薦したい。西洋のことと言えば概括的な天下国家の話が多いと感じるが、こうした記録によっていわば西洋における等身大の地方農民の暮らしを知ることができる。ただし、上記のような農村の姿を記述した箇所に至るには、著者の案内に従い、パリからしばらく列車に乗って旅しなければならぬ。およそ百年前のフランス中部を。

良質なお酒は、洋の東西を問わず地域環境の賜物です。今回は「おいしい水」に係る「おいしい本」を紹介しましょう。ただし「おいしい水」の方は、二十歳の誕生日を過ぎてからお試してください。

## スコッチへの旅

平澤正夫 新潮選書（古書のみ）

### もし僕らのことばがウィスキーであったなら

村上春樹 新潮文庫 546 円

30年以上前からミシュランの地図をつまみに、いつかスコッチの蒸留所巡りを夢見ながらシングルモルトを楽しんできました。そのきっかけは、既に絶版になっている敬愛する詩人田村隆一著「ウィスキー賛歌—生命の水を求めて」でした。絶妙な文章と地域環境に溶け込んだ蒸留所の写真に観る景観が私にスコットランドへの旅を誘いながら、まだ実現していません。本書らは、さらに詳しくスコッチ（シングルモルト・ウィスキー）の解説とモルト蒸留所全踏破、バブ逍遥という羨むべき旅への誘いを記した書誌たちです。ちなみに私のお勧めはアイラモルトの「ラガブリン」。君たちにとっては少々高いのですが、そのスモーキーな香りは格別です。（いつのまにか本から水へと想像力が勝手に移行していました）

## カラー版 極上の純米酒ガイド

上原浩監修 光文社新書 126 本体価格 950 円

純米酒は、米と米麴と水だけで醸造する酒です。新潟の誇る米文化の粋として、是非君たちにも継承してもらいたいと思います。本書は全国を踏査し、蔵元はもとより居酒屋から酒飯店までをコンパクトな新書版に網羅した、純米酒のバイブルです。地方出張の際には必ず事前に参照して、訪ねるべき純米酒居酒屋をチェックします。こちらのお勧めを本から液体へと移行するならば、本書では、新潟は「真稜」と「緑川」が挙げられていますが、あえてわがふるさと埼玉の「神亀」としておきましょう。

## きのう何食べた？（1 - 5）

よしながふみ 講談社

よしながふみさんといえば、BLマンガの大家（！）ということになっているけれど、『西洋骨董洋菓子店』のシリーズからして、実は料理やケーキの描写が実に上手でした。本当に食べたくなるような、おいしそうな画を描くんですね。『きのう何食べた？』も、実においしそうな、しかも簡単で安価な料理が満載です。BLが主題なのか料理が主題なのか、微妙なところをよく突いています。先日も、とある学生が私の研究室で、「今日の夕飯、何にしようかな？」と言いながら、この本のページを繰って、ある日の夕食のレシピをメモってました。ただし、この本の料理を再現するには、手際と技術が馬鹿になりません。あの学生はちゃんと調理できたのでしょうか？

## 美貌の果実：川原泉傑作集

川原泉 白泉社文庫

料理マンガか、それとも農業マンガか？ 珍妙な怪作を連発する川原泉さんの 1986 年の作品。「愚者の楽園——8月はとほけている」「大地の貴族——9月はなごんでいる」「美ほうの果実——10月はゆがんでいる」の3作からなる連作。それぞれが、指宿の熱帯果実園と女子高校生、北海道の牧場での馬のフォンタナ・ゴールド号と牛のパースの道ならぬ恋、山梨の潰れかけた葡萄園に現れる行基菩薩（?!）というぶっ飛んだお話ですが、マンゴーやらバターやらワインのうまそうなこと。

# 納豆の研究法

村松芳多子他 恒星社厚生閣

薬学部に進学した友人が、実験室で薬品を量るときのように、パイレックスの計量カップの中のお酒を視線と同じ高さまで持ち上げて、「100CC!」と量ったら、お母上に、「おいしくなさそうだからやめて!!」と??られたそうです。本書は、納豆を研究する際の実験・操作マニュアルなので、おいしいかといわれると、あんまりおいしいはなしのだけれど、納豆のことをよく知ることはできます。それから、健康栄養学科ではどんな研究の仕方をするのか、ということも何となくわかってきます。納豆というのは食習慣に組みこまれている地域とない地域がはっきりとあって、不思議な食物ですが、次はこうした人文地理学的な研究方法も紹介してもらえないかしらねえ  
○×△○×先生?!

# 珈琲時間

豊田徹也 講談社

おかしなマンガです。コーヒーをめぐって変な人たちが暗躍します。嘘つきのイタリア人映画監督とか、ブック・カフェと称して倉庫代を浮かしている倒産した古本屋とか。作中で、このヘンテコなイタリア人は、ヨーロッパのコーヒーは苦くて濃くて、それと比べると日本のコーヒーは薄くて酸っぱいけれど、これは素材の味を生かしているのだねえ、と言ってます。なんか、うそっぽいです。ヨーロッパの水は硬水なので、深煎りの豆で濃く淹れないと味が出ません。そこへ行くと、ニューヨークや日本の水は軟水なので、薄くても味が出るんです。酸っぱいのは、これは好みの問題。日本の多くの喫茶店では、もともとがキリマンジャロ等の酸っぱい豆を使い、これを浅煎りにしているから、酸味が強いままなのです。深煎りにすると、苦くて甘いコーヒーになります。私は深煎りで苦いのが好きなので、街中でこのイタリア人と出っくわしたら、大喧嘩ですね。

# かもめ食堂

群ようこ 幻冬舎文庫

これは文句なしにおいしいです。すべてを捨て去って無一物でヘルシンキにわたり、おにぎりの食堂を始める日本人女性。ガッチャマンの歌を全部知っている女性とそれを知りたがるフィンランドの日本オタク青年。フィンランド語など全然わからないのに、酔っ払ったヘルシンキの女性の口説きが全部わかっちゃってる日本人旅行者の中年女性。どれも不思議な人たちばかりですが、よく考えると私たちの誰もがそんなところをかかえているのかもかもしれません。そして、おにぎり。これはもう、しゃけとおかかたらこでしょう。そして、パリパリの海苔と。

# 村上レシピ

岡本一南 ゴマ文庫

村上春樹さんの小説にはたくさんの料理が出てきます。作家になる前、彼自身が神戸でバーを経営していたということもあって、料理はプロです。小説を読んでいると、とにかくおいしそう。そう思った人はたくさんいたのですが、岡本さんは本当にこれをレシピ化してしまいました。だれにも作れそうで、大変よろしい！ そのメニューが出てくる小説の一節の引用と料理の写真、これにレシピがそえられて、小説についての蘊蓄が語られる、という構成です。

## クスクスの謎：人と人をつなげる粒パスタの魅力

にむらじゅんこ 平凡社新書

私はかつてフランスに暮らしたことがある。フランス語はものにならなかったが、彼の地で人生の宝物をいくつか入手することができた。例えばワイン、オペラ、そして恋の「哲学」などだが（恋の「実践」に関しては個人情報なので割愛する）、本書が題材とするクスクスもその一つである。メインディッシュにクスクスがある日の大学学食は、学生たちの歓喜の声で満ちていた。「人と人をつなげる粒パスタの魅力」という副題はいただけないが、終章の「自由、平等、クスクス」にいたるまで内容はとても魅力的かつ実用的だ。ただしクスクスの魅力にはまってから読む本だという気もする。そのためにもまずはフランスに行き、あるいは巻末の「国内でクスクスが食べられる店」を参考に、ワイン片手にクスクスを食してみることだと思う（そして食後はミントティー！）。

## 家庭で作れるロシア料理

料理・荻野恭子 エッセイ・沼野恭子 河出書房新社

気になったレシピ本や料理雑誌をつい買ってしまうのが悪い癖で、山のようにたまっているのですが、その中で一番よく開くのはこの本です。ロシアやロシア料理に関心のある人は必携ですが、これまで縁がなかった方、「ボルシチ」くらいしか知らない、という方もぜひ！「おいしい」ロシアを体験してください。

余談ですが、「ロシア料理」というタイトルで、（あまり更新しない）ブログを開設しています。 <http://kukhnja.seesaa.net/> この本の料理を作ってみた感想や、ロシアのレシピの翻訳なども載せていますので、興味があったらお立ち寄りください。

# 文人悪食

嵐山光三郎 新潮文庫

「悪食」というと、臓物や昆虫といったものを連想しますが、この本にはちゃんとおいしいものも出てきますのでご安心を。夏目漱石、森鷗外、幸田露伴から三島由紀夫に至る文人たちの、食にまつわるエピソードや関連作品がちりばめられていて、「食」を軸にした、すぐれた日本近代文学案内になっています。ルビがたくさん（背表紙にまで！）振ってあるのも嬉しい心配りです。

嵐山光三郎といえば、「料理ノ御稽古」（光文社文庫）で紹介されている、伊勢海老の味噌汁、毛ガニ丸ごと炊きこみご飯、キノコの漬けもの、キノコの押し寿司、などの豪快な料理も読んで楽しいのですが（お金があったら実践したいものです）、こちらは絶版のようで残念です。